

文 献 抄 録

仕事に対する姿勢

OT とその補助職員は自分達の仕事への姿勢をどう評価しているか、また相手に対する評価はどうか、という調査が行われた。

1979年7月の Canadian Hospital Directory で確認された OT を雇用している 96 のオンタリオの病院が調査に含まれた。回答は OT の機能を有していない 6 病院を除く 90 病院のうち 71 病院 (78.9%)——OT 158 名、補助職員 81 名——より寄せられた。質問の主たるものは、“仕事に対し OT を motivate させる最も重要な factor は何か” “仕事に対し補助職員を motivate させる最も重要な factor は何か” という 2 点で、提示された 6 項目の中から 1 つ選択するものである。得られた情報は質問ごとに 6 項目それぞれに OT の回答率、補助職員の回答率が算出され、 X^2 検定による分析がなされた。

結果は、OT も補助職員も共に自分達は第一に仕事に対する challenge により motivate され则认为ており、補助職員は自分達に対するのと同様な評価を OT に対して行っているが、OT は補助職員に対し仕事への challenge ということよりもむしろ経済面や仕事の安全性に

よって motivate されるのだと評価している、ということが示された。また OT と補助職員間の相違をはっきり予測しうるものとして以下の 4 点が有意に高い値を有した。1) OT 部門内の補助職員の数。2) OT 部門を有する市、町の人口。3) OT または補助職員が相手に対して行った motivation の評価 (全く motivate されていないから常に motivate されているまでの 5 段階評価)。4) それぞれの回答者が OT と補助職員の work motivator として第 1 に選択したもの。

結果が示す OT と補助職員の認識の違いはわれわれ固有のものではなく非専門の人々に対する専門職の人々の姿勢であるといえよう。そのような姿勢が適切な職務の委任を妨げ、また過大評価されて仕事を行うため専門、非専門双方の成長を阻むことになるのである。

Jennifer H, Steve T : A Study of Attitude Towards Work ; Possible Implications for Delegating Responsibility. The Canadian Journal of Occupational Therapy 50(3) : 77-79, 1983

(北海道大学医療技術短期大学部

作業療法士 藤川 緑)

文献抄録

下腿切断への脱着可能なリジッドドレッシング

術後の切断端ケアの目的は創治癒の促進と浮腫の軽減、萎縮促進である。弾力包帯やリジッドドレッシングが用いられているが、皮膚損傷や浮腫、萎縮遅延を招き易く、断端観察が困難、技術を要するなどの問題も多い。本論はより簡単で効果的な方法として、脱着可能なリジッドドレッシング法について述べてある。

手技：断端に直接スタンプソックスを3枚つける。内側彎曲部と脛骨突出部にパッドをあて、更に全体が先の丸い円筒になるようにパットを加えた上でギブスソケットを作る。そして懸垂装置としてソケットより長めのストッキネットの一端を結んだ袋およびベルクロ固定式のプラスチック製順上カフを作る。装着も上記の順で、断端観察、衛生および仮義肢歩行中以外は昼夜問わず装着し、体重負荷は術後10～14日から状態により調節する。萎縮が進めば内側スタンプソックスを足すか（市販の靴下で代用可能）ソケットを製作し直す。

結果：前記方法の対象下腿切断者は16例（うち両側2例）で、比較グループとして過去切断し弾力包帯によるケアで現在歩行可能な者を30例調査した。切断から仮義肢装着までの平均期間は対象者グループで46.2日で比較グループでは109.5日であった。切断から仮義肢での歩行退院までは前者で101.8日、後者で191.4日であった。また本法では体重負荷量の増加調節も断端チェックを随時容易にできる事で安全に進められた。

以上のことから本法は従来の方法と比べ安全かつ効果的、制作が簡単で安価など、多くの利点を持つ断端ケアの新しい方法であると考えられる。

Yeongchi Wu, et al : An Innovative Removable Rigid Dressing Technique for Below-the Knee Amputation. The Journal of Bone and Joint Surgery 61 : 724-729, 1979

（川崎医科大学付属病院 理学療法士 永富 史子）

理学療法教員としての資格を証する教員証明書について

1977年9月以降、理学療法士は教員資格証明書を与えるカレッジで教員の養成訓練を引き受けることが出来るようになった。この論文は、これらの教育課程の沿革、理学療法教育とのかかわりあい、課程の仕組み、内容、教育実習の調整、評価について明らかにするものである。「マックネア報告書1944年」にしたがって、戦後の時期に Bolton, Huddersfield, London, Wolverhampton の各市に技術系の College of Education が設置された。当時、学生の大部分は技術系、貿易業務系、企業経営研究分野の出身であった。ここで教員資格を得たものは、再教育をほどこすカレッジに就職した。これらのカレッジが設置されて間もなく看護婦が教育課程に入学を認められた。ガーネットカレッジを除いて各カレッジは現在、ボルトン上級教育学園、ハダースフィールド技術学校、ウォルバーハンプトン技術工芸学院とより大きい施設となっている。理学療法士は、この4つのカレッジとカーディフのユニバーシティカレッジおよびグラスゴーのジョーダン教育カレッジで教員として訓練を受けることが出来る。このコースでは、専門家としての課題と直接教えこむことは最少限にとどめて、教育理論、教育

実習が中心課題となっている。なお専門的講義も短期間設けている。

教員資格証明書は、1カ年の大学全日制課程で取ることになっている。コース内容は大きく分けて教育理論、教育技法、教育実習の3分野といえる。習うこと、教えることにかかわる心理的要素を深く理解するためや、教員としての必要な技能を身につけることを目的としている。教育実習は課程の6週間目に第1回目開始され、4～5週理学療法学校に行く。1977年以来95人の理学療法士が教員資格証明書をもらっている。本学年度中には21人の学生が証明書を受けるべく勉強している。コースを修了した後、理学療法学校で1学期間専門的研究を行い、これに合格すれば理学療法教員証明書（Diploma for Teachers of Physiotherapy）が与えられる。このうちかなりの学生が学位コース（教育学士課程など）に進む。

Hussey T : The Certificate in Education as a Qualification for Teachers of Physiotherapy. Physiotherapy 69(7) : 224-226, 1983

（高知リハビリテーション学院 理学療法士

中屋 久長）